主日の福音 2026/10/18(No.1438)

年間第 29 主日（マタイ 22:15-21）

これは、だれの肖像と銘か

皆さんそれぞれ、好みの車とか、予算内で買った車をお持ちでしょう。それが「H」だったり「T」だったり、「D」や「S」だったりするわけです。ある先輩は、輪っかが 4 つ、横並びになっている車でした。このヒントだけで一定の方々は「高級外車だ」とお分かりと思いますが、維持するのは大変だったでしょう。

その、「H」とか「T」とかは、イエス様のおっしゃる「これは、だれの肖像と銘か」（22・20）に通じます。「H」のマークを見れば、「格好良さを重視している持ち主かな」と想像します。全てではないでしょうが、「肖像と銘」は持ち主の考えを推理する手がかりです。

今週の福音朗読に登場するファリサイ派の人々は、皇帝への納税問題を切り口に、イエスを訴える口実を見つけようとします。日常生活で流通していた貨幣はローマのデナリオン銀貨でした。この貨幣にはローマ皇帝の肖像と銘が刻まれていて、当時すでにローマ皇帝は神格化（神様扱い）されはじめていました。

ですからイエスが「納税は律法に適っている」と言えば「神は唯一であるのに、律法を否定している」と訴えることができ、「納税すべきではない」と言えば、すでにローマ帝国の占領下にあったユダヤの国で、「ローマ皇帝に歯向かう者」として訴えることができたからです。

イエスは、ファリサイ派の人々の偽善を見抜いています。問題だったのは、彼らが納税について疑問を持ったそのことではなく、イエスの答えから真理を学ぼうとせず、訴える口実ばかり探していたことです。神への忠実さを議論に上げながら、その問いを自らの回心のためではなく、相手を陥れるために利用していました。そこでイエスは税金に納めるお金を、「これは、だれの肖像と銘か」と問うたのです。

その上で、イエスはファリサイ派の人々の罠を抜け出すだけにとどまらず、もっと大切なことを伝えるための答えを示しました。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」（22・21）ファリサイ派の人々の質問を打ち破るだけなら、「皇帝のものは皇帝に返しなさい」だけで十分でしたが、さらに加えて「神のものは神に返しなさい」とおっしゃったのです。

では、「神のもの」とは何を指しているのでしょうか。「だれの肖像と銘か」ローマ貨幣には、皇帝の肖像と銘が刻まれています。同じように考えると、「神の肖像と銘」が刻まれているものがあるということになります。皆さんすでに答えが浮かんでいるでしょう。神が創造された人間にも、「肖像と銘」が刻まれているわけです。

旧約聖書、創世記 1 章に、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」（創 1・26）とあります。最初の人間アダムのときから、人には神の肖像と銘が刻まれているのです。そしてそれぞれの生き方を通して、神に自分をお返しすることが期待されているのです。ファリサイ派の人々は皇帝への納税問題は熱心に議論しても、自分自身を生き方で神にお返しせよとイエスに言い返されて、一言も返せませんでした。

ルカ 11 章でファリサイ派の人々は厳しく咎められています。「フ

ァリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。」（11・42）実はこの指摘は、私たちもまた考えるべき点です。本当に神が求めていることを、社会に対して、教会に対してお返ししているだろうか。

たとえば教会の掟には、「それぞれの分に応じて教会維持費を負担すること」とあります。それは教会共同体を支える大切な務めです。しかし、神にお返しするということは、維持費を納めればそれで終わり、あとは役員や地区委員に任せれば良いということではありません。

もちろん教会には、さまざまな事情を抱えながら信仰を生きている人がいます。目に見える奉仕ができる人もいれば、病気や家庭の事情によって、思うように参加できない人もいます。それぞれの置かれた立場で生きている信仰生活を簡単には判断できません。

それでも、一人ひとり自分自身に問いかけることはできます。神からいただいた時間、能力、財産、そして人を愛する心を、私はどのように神と隣人にお返ししているだろうか。教会共同体の中で、できることは何だろうか。今から、できる一歩をぜひ踏み出していただきたい。

さらに掘り下げて考えることもできます。「神の肖像と銘」が刻まれた存在としての使命を、次は置かれた身分で果たしているかどうか。私たちは皆、洗礼を受ける前から、神の似姿として造られています。さらに洗礼でキリストに結ばれ、堅信でその信仰を強められ、司祭は叙階の秘跡で特別な奉仕の務めをいただきました。では、神からいただいた異なる恵みを、私たちはどのように生きているでしょうか。

ときおり私にも、大人になって洗礼を希望する人と巡り合わせてもらうことがあります。その人がなぜ洗礼を受けようと考えたか、その人なりの思いがあるでしょうが、心の中で「神のものは神に返しなさい」という声を聞き、それを果たしにやってきたのかなと思ったりします。

お恥ずかしい話ですが、そうした成人受洗希望者が現れると、こちらもあらためて洗礼のための勉強をすることになり、叙階までいただいた「神の肖像と銘」の使命をあらためて自覚し、「神のものは神に返す」そのきっかけが与えられるのです。本当に感謝しています。

「これは、だれの肖像と銘か」。人は、神がその人をお造りになった時すでに肖像と銘が刻まれました。その中で、ある人は洗礼によって、ある人は堅信によって、ある人は叙階や誓願によって、その肖像と銘がさらにはっきりと刻まれたのです。私たちは生活を通して、どれだけ「神のものを神に」返しているでしょうか。時間やお金だけでなく、思いも含め、神にお返しできているなら幸いです。

イエスが最後に言われた「神のものは神に返しなさい」という答えを、今週一週間、私の心に響かせましょう。私の心の中で響かせたことが、あるいは周りの人の心に響き、より多くの人が「神のものは神に返す生活」を心がけるようになるかも知れません。

年間第 30 主日(マタイ 22:34-40)